

二、村めぐり

21 (一) 祇王井川

祇王村と岩根村との接合線は僅かに四百メートルにすぎない。

祇王小学校の子供仲よし会の永原・富波・北村君に辻・上屋・中北・五之里さんの七人が村の西入口である富波の踏切近くで待っていると、隣村の野洲雄君に里子さんに篠子さんの三人がやって来た。岩根さんは隣村ではあるが、山を越えた向こうでもあり、郡も甲賀郡なので、きょうは見えなかった。

「やあ、この間は、あなた方の村や町を案内していただいて、ありがとうございました。きょうはこれから私達の村を御案内致しましょう。」

22 「祇王村の入口は、ここなんです。百メートルほど西のあの踏切りですと、はっきり村界がわかるのですが、鉄道が出来た明治二十二年よりも先に村が出来ていたのですから、仕方ありませんよ。」

「すると富波の踏切りというけれど、ほんとうは野洲町の土地ですね。」

田中山は高さ二九三メートル

「そうですよ。あの田中山の上と比江の松林とを見通した線が、私の村と野洲雄君の町との界になるのです。」

「おや、まるでアメリカの州界か、アフリカの地図のようですね。やはり緯度か経度で界をきめたのでしょうか。」

条里図は三頁にあり

「いやいや、これは後の五之里の所でお話を致しますが、千三百年昔定められた条里の名残なのです。こうして野洲雄君の野洲町との界は九条と十条の界になりますし、里子さんの村の中里村との界は、五里と六里の界、篠子さんの篠原村との界は四条五条の界です。条里図とあわせて下さい。」

「野洲郡のほかの村にも、こんなのがありますか。」

「ありますとも。小津村と玉津村、玉津村と河西村、守山町と河西村・玉津村の界などがそれで、とりわけ玉津村大字^{じゅんのり}十二里などの界は、それこそ条里そのままですよ。」

「それでは、あの池もやはり、その当時からのものなのでしょうか。」

23 「いいえ、鉄道の沿線には、よくあのような池があるものです。この村には、上屋のをはじめとして、たくさんあります。それは鉄道を敷く時に、土が必要なので掘り取ったものです。それはまた鉄道で用水路が絶ち切られたりしたので、一は貯水池の為にも作られたのです。」

「では、それこそ一石二鳥ですね。それはそうと、この川は何という川ですか。」

「これぞ名高き祇王井川。」

「これは、これは、大そう改まって下さったね、祇王村を流れているから、祇王井川でしょう。」

この地は洪水、渇水共に困った地であつたらしい。

白拍子
平安時代末に始った舞の名。またこれを歌い舞う女の人をいう。白い水干（すいかん）を着て舞ったから白拍子という。

平家は塩で、源氏は鉄で天下を支配しようと考えたといわれる。

京都疏水
堀どめ地蔵
県史と琵琶湖治水沿革史による。

祇王祇女がこの地の人であると書いてある本は
・輿地志略
・淡海温故録
・大日本人名辞書
・近江人物志

流布本 平家物語には
妓王としてある。

父 宗盛
子 清宗

「いやいや、それは反対なのです。祇王井川があるから、祇王村という名が出来たのです。」

「これについては、後で私の学校の苗村先生が話をして下さいるので、私は別のお話をしましょう。」

祇王井川がうねうねとうねっている、川岸の芝生の上に皆は腰をおろした。

「祇王井川の物語は、遠く平家の時代にさかのぼる。その頃、この辺は水利が悪く、日照りでも続けば、それこそ人々は飢え死をしたもので、ポンプのある現代の私達には想像も出来ぬ位に困ったものでした。やがて行く中北と北村との間に、堀のある屋敷跡があるが、そこで生まれて育った、祇王祇女の姉妹は京都に出て、白拍子^{しらびょうし}となって平清盛に仕えました。自分の生れ故郷の人々が田用水にめぐまれず困っていることを清盛に告げて掘られたのが、この祇王井川です。それから八百年、年々この村の田がその恵みにうるおっているのです。

ここで私達が考えてみなければならないのは、平家の積極的な経済政策、ちょっとむつかしくなったが、たとえば今までの藤原氏などでは、ただ庄園から年貢米（昔はお米を税としていた）をとりたてていただけであったが、平家が政治をとってからは、ただ取るだけでなく、池を作ったり、溝を掘ったりして、土地の力を十分に出させて年貢をとるというやり方で、今までと違ったやり方で国を富ますように考えた。たとえば、今の神戸港のもとを築いて中国（宋）と貿易を開いたりしたことも、皆同じことで、武力一辺の源氏とおもしろい対照です。今の京都疏水^{そすい}を当時すでに平家はやりかけたといわれ、また塩津と敦賀とを結ぶ運河も計画したがうまくいかず、今も深坂山中にその堀どめ地蔵があるが、こうした伝説も平家のいきいきとした経済のやり方を伝えるものでしょう。

祇王井川もこうした平家の政治のあらわれとも見えます。

祇王祇女はこうして用水路をひらき、村の人々と平家との間にあって、祇王村千年の大きな恵みを与えたので、明治二十二年に町村制がしかれた時、今の七大字が寄って祇王祇女の恩をいつまでも忘れぬ為、義王村と名付けました。

ところがよく調べると祇王祇女は、京都の祇園感神院の名にちなんで祇という字を取ったらしいと、もう一つは祇王祇女の事が書いてある平家物語には「祇園精舎の鐘の声」と書き始めているなどから考えて、義を祇とかえて今の村の名が出来たのが明治二十七年十月十三日のことである。つまり五年間義王と書かれた時代があるのです。」

「おやおや、大へん時間がたちましたね。帰りにはここから近い篠子さんの村の出町にある平家の大将宗盛父子の首洗い池へ行き、そのの胴塚に一りんの花をささげましょう。」

(二) 富 波

富波新町(甲)
富波沢(乙)
明治五年合併して
甲、乙となるたえ路
傍の一片の苔むした碑
も郷土を語る。

家棟川の上流はすべて
花崗岩からなり、風化
しやすく樹木の繁茂は
困難。

26

沢村を新町村に対して
古富波という沢弾正と
は六角佐々木の一党で
櫻生の城山にいた。

込田が耕田に変わるのは
後で説明あり。

素神の話は治水神話
であるというのは肥後
博士の説。

蛇の伝説は民族学的
には米作を大事にした
日本の社会的産物であ
る(柳田国男
著「伝説」による)

禹は黄河の治水で王と
なり夏という国をつく
る。

富波に藤村の多いのは
藤原忠重の藤原氏より
の分れで藤村とか工藤
とか安藤藤井などと分
れていったのだといわ
れる。

27

富波から五之里道の入口に二基行儀よく並んだ御神燈がある。元治元年に建てられたといえは今から九十年前、あの蛤御門の戦の不安な年にできたことに注意しよう。

ここから橋を渡ると生和の森があり生和神社がある。ここの祭神は生和三郎藤原忠重という方である。この人は藤原氏の一族であるから、かたわらに藤原氏の氏神である春日神社がある。

伝えるところによると、大昔はこの地方は一面の沼沢地であった。名にし負う家棟川という天井川が、川上から風化した土砂を運びつつ童子川の横腹に丁字形につきあたり、そこへその土砂をぶちあけて、それより下は川底がひくくなり、なおその上、川下の川幅がせまくなっている。そこで水はいきおい逆流して雨期ともなれば一面の沼沢地となる。だからこの辺を昔は沢村^{さくらばま}といった。或本には桜生^{さくらばま}の沢弾正に治められていたからだと言われるが、事實は沢地だったからで今の富波という名も波に富む - - つまり水に富む - - というわけである。その水は水の必要のない時に富むのだから困ったものだ。日本の神話にも素戔鳴尊^{すさのおのみこと}という方が毎年やってくる八岐大蛇のために人々がこまったのでそれを退治せられた話がある。本当に年々やってくる洪水でこの地方の人々は困ったものだった。

こうした悪水のなやみを除いて、此の地を今日の美田に開拓したのが生和三郎その人で、素戔鳴尊の八岐大蛇退治を治水神話だといわれるが、生和三郎の開拓の神話もその大蛇退治に劣らぬ大事業で、今も正月十八日の御弓の神事には、巨大な大蛇を縄で作って弓で射られるのである。 - - この御弓の神事は、一は悪魔退散の祈りであるとかいわれている。

昔、中国では水を治める者は天下を治めるといわれたが、実にこの地の悪水を治めた生和三郎藤原忠重はこの地の人々の信頼を得てついに神にまつられた。謂はば郷土の禹^うともいふべき人である。それ以来この富波は波たたぬ止波となったわけである。これがおそらく実説であらう。

昔は広沢山光徳寺の憎が代々生和神社の神事を兼ねて掌どっていたといわれる。この光徳寺はもと天台で香雲寺と言ったが、文明十年(一四七八)欣蓮^{きんれん}という人が真宗に帰したのである。

伝説によると、この神社が出来たのは今から九百四十年の昔の長和年間、この字の西にあった沢に大蛇がいたのを忠重が長和元年八月十二日にこれを射殺したので、里人はこれを崇めたのが起りだといわれている。

生和神社の今の本殿は本郡の神社の中で一番古いといわれている。今度新しい文化財保護法による国宝ときめられた御上神社と同じく鎌

生和神社の建築は
・日本古建築 菁華下冊
・国宝綜覧 滋賀県上篇
に詳しくのっている。

富波甲の人形芝居は郷土芸術としてとうとう無形文化財であるこれは明治のはじめ藤井正助（大正二年没）という人が創始したもので、人形は二百年前のものが現在は小形が破損、明治から大正にかけて最盛、現在衰微。

文学博士
中村直勝先生

木綿が織られるよりも絹の方が古いのである。

亀に似ている、かめ女、共に輿地志略にのっている。

船載鏡
中国から渡ってきた鏡のこと。

倉時代の建築で詳しくいうと弘長二年（一二六二）の建築だといわれている。しかしその年代は、はっきりとはいえないが^{かえるまた}髹股の彫り方などから観るとその頃の建築であることに間違いはなさそう。明治三十五年国宝（旧制）に定められた一間社流^{ながれづくり}造で屋根は檜皮葺^{ひはだがき}でいろいろとすぐれたところがあるが説明をはぶく。ただ正面の髹股は三つの宝珠に霊雲をあしらえる見事なものであるからとくに見おとさないように願いたい。

明治の末年になってから、お合わせといって方々の神社を一所にまとめられた時、もと小字野野宮にあらた野槌神と（明治四三）小字山ノ口にあった^{はんだわけのみこと}誉田別尊を（明治四四）ともに合わせてお祀りした。

また末社の春日神社は昭和二十四年に国宝（旧制）に定められた。これも同じ鎌倉時代の強い中にもやさしさのあるすぐれた神社建築である。

28 拝殿に明治十二年に奉納された征韓論の扁額は眺めていてもあきのこない面白さがある。それにはいろいろな史的な意味がある。また入口の石の鳥居は明歴二年（一六五六）に造られ、当時この辺を領していた^{しゅんこう}芦浦観音寺舜興法師・永原井狩重助宗重の名がきざまれている。今も^{かくら}神楽田という小字があるので昔はかなりの大きな神社であっらしい。

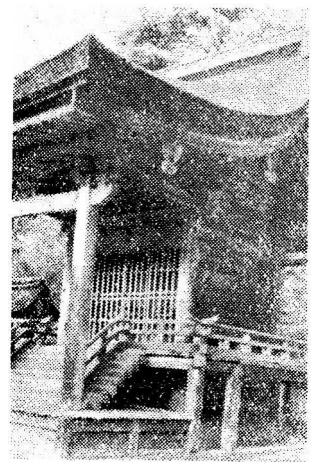
また或る学者は^{いくわ}生和とは生桑で荒地で桑が沢山作られていた。この桑で蚕を飼ったのが中里村の^{むしう}虫生で錦を織った（^{きんしよくじ}錦織寺）のが^{きべ}木部（^{はたおりべ}機部）であるといわれている。なるほど隣り合った三つの部落である。童子川の水に取り持たれて同一の運命で結ばれていた時があったらしい。

この神社の鳥居の前をまっすぐに行くと、右手に円塚がある。これが俗に亀塚とよばれてその形が亀に似ているからだとも、或は亀という女の人の塚だからともいわれるが、これは神塚が転じたのではなかろうか。

道を距てた反対の西側に、今は茶園畑になっているが、元は^{ことばやま}古富波山といわれた富波古墳があつた。

29 明治二十九年春発掘されて古鏡三面が発見された。いずれも実に優れた^{はくさいきやう}船載鏡で、ドイツのベルリン博物館へ送られたが、一面だけはその土地の持主である竹内氏が今も所蔵されている。

こうした古墳と神社の祭神とは何か関係があるのではなかろうか。古墳は何といってもこの土地開拓の祖神のねむるところであり、自分のありきりの精魂を捧げた^{たくど}拓土に骨を埋めた墳墓でまことに尊いところである。



（生和神社本殿）

現在竹内家にあるのは、
径七寸二分五厘
縁厚三分九厘
三角縁三神五獣鏡と名づけられるものである。京都大学 梅原未治博士の調査によると恐らく円墳であろうといわれる。
表面に薄手の弥生式土器が散在していた。
・考古学雑誌
・第十二巻第二号

古墳をそのまま神社にしたものには、熊野の伊弉諾神社、信濃の諏訪神社。近いところでは、杉江の小津神社もそうだとされている。

日本教育資料 私塾寺小屋表による

30

元龜二年（一五七一）
信長叡山を焼く。

蓮華寺は坂田郡息郷村にあって、名を惜しむ関東武士四百三十余人が腹かききって死んだところ。

辻町の奥の弥勒寺城ではないが当時は寺がそのまま城となったものさえある。

32

富波の名の起りは、たとえ悪水の満ちた処から来た名かも知れないが、今は黄金の瑞穂^{みずほ}の波の富む豊穰な地となつた。それは決して自然になったのではない。営々たる祖先の汗とあぶらのおかげである。黒い土は祖先のからだ、溝はその温かい血管である。土地とは決して冷たい土という鉱物の積ったものではない。私たちの祖先は朝な夕なこの小高い岡にねむる最初の御親に敬虔な感謝の祈りを捧げたことであろう。

街道南側にある吉祥山遊林寺も前の光徳寺のようにもとは天台であったが天正の頃（十六世紀後半）大へん荒れ果てたが文禄元年（一五九二）に真宗となり栄えた。

ここの住職林了教という方は弘化三年から明治元年まで寺小屋を開いておられた。万延元年（一八六〇）頃には男三〇女五の児童をあずかって居られた。寺はそれこそ智慧の光明であった。

常楽寺は天台で堀河天皇の嘉保二年（一〇九四）の建立で、ずい分古い寺だがおいしいことには元龜三年（一五七二）兵火にかかって焼け、それから百年程して万治の頃（一六五八）に再び建てられた。

この辺の寺は、とりわけ天台宗はたいいてい織田信長にいらまれて焼かれてしまった。野洲郡に建物で旧国宝は全部で十五件あるが、お寺は一つもないのは信長の頃すべて焼き払われたからで常楽寺もその一つである。（旧国宝の十五件はすべて神社である。）

字新町にある浄土宗の西念寺は天正十三年（一五八五）に開かれ、字町ノ裏にある仏願寺は古く行基が開いたといわれているが、永正の頃（一五一五）焼けて間もなく（一五二五）再興して真宗仏光寺派となる。

また光明山遍照寺は足利幕府の末、永禄の頃（一五六六）やはり兵火にかかって焼け、二百年後の寛延三年（一七五〇）に再興された。なぜこうして寺院が兵火にかかったか、それにはいろいろ理由もあるが、ちょうど番場の蓮華寺ではないが、武士が最後の地、死に場所として寺で防ぎ、寺へ逃げ込むため、自然とそれが戦火にみまわれるのだろうか。

^{はなぞのざん}
花園山円住寺は真宗木辺派であったが、同じく永禄の兵火にかかってすっかり焼け天正年間に再興されたものである。

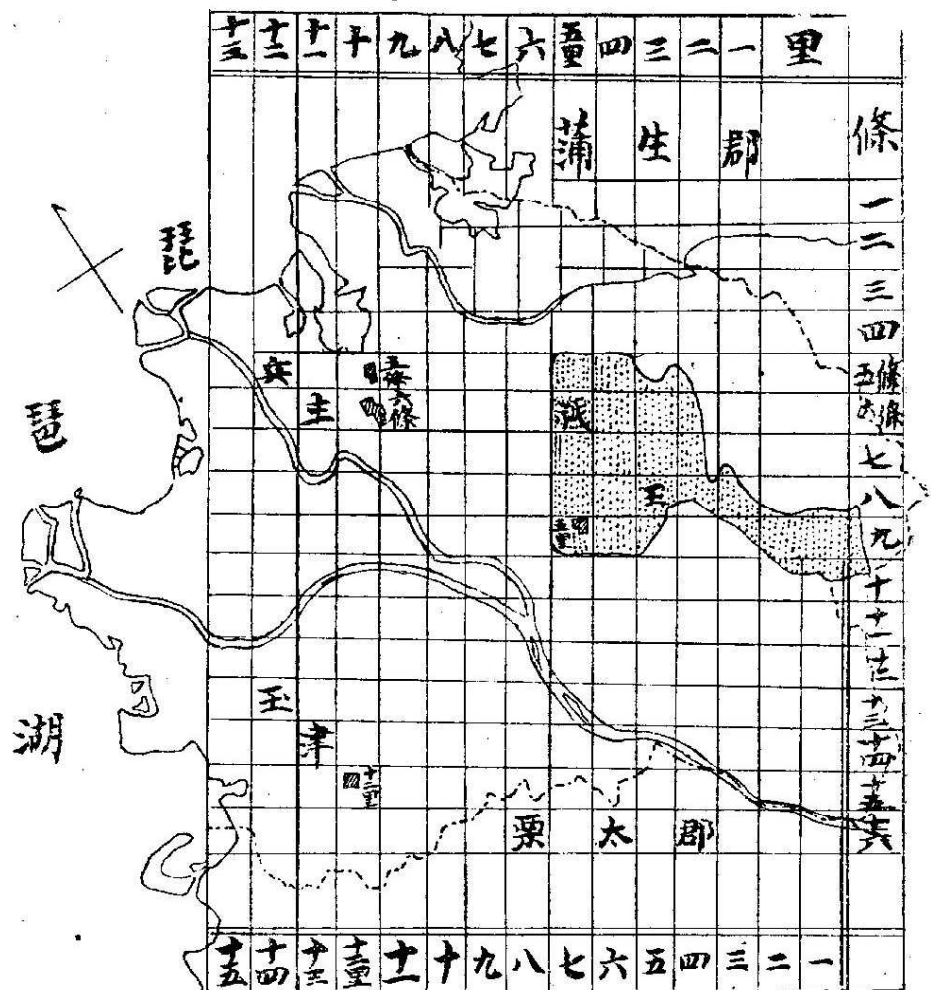
鈴木山光円寺（真宗）は慶安二年（一六四八）に再興されたものである。

お宮さんとお寺の歴史を話したような事になったがお寺は信仰の中心であるのは勿論で、それはまた文化のセンターでもあった。昔の人は学校を建てるように寺を建てたもので今もなお八ヶ寺を数えることはこの富波の人々がどんなに信仰があつく、文化の香を求めたかを知るよすがでもある。富波の大部落は一つのお宮さんと八つのお寺で安定された静かな部落である。

坪 割 例

三	二	一	一	七	一
一	五	九	三	八	坪
三	二	二	一	一	二
三	六	〇	四	五	坪
三	二	二	一	一	三
三	七	一	五	六	坪
三	二	二	一	一	四
四	八	二	一	〇	坪
三	二	二	一	一	五
五	九	三	一	一	坪
三	三	〇	一	一	六
六	〇	四	八	二	坪

野 洲 郡 条 里 図

約 $\frac{1}{120000}$ 

(三) 五 之 里

昔は富波庄の一で佐々木の一族、永原氏同族の富波盛重に治められていたが、天正の乱に村家も寺も兵火をうけたという。

野洲郡の向こう岸、さざなみの大津宮に都をお定めになった天智天皇が、まだ皇太子であらせられる頃に、あの名高い大化の改新が行われた。(六四六)

その時日本中の土地をとりあげて、あらためて男子には二反、女子にはその三分の二を与えることにせられた。それに就いては、先づ地

班田収授

1町 = 約109メートル
1反 = 360歩で大人1人1年360日間の米の量、故に2反あれば十分生活出来た。今日1反から米がもっととれるのはなぜか。

33

坪割には、千鳥式、平行式等ある。

妻ノ神は塞神とかいわれ民俗学的にいろいろと説がある。

この辺の寺は錦織寺をはじめ、多くは天台であった。それは、この地方が比叡山の庄園であったからである。隣字の比江は比叡日吉からきた名だといわれる。

・神社は屋棟神社とかく。
・家棟川とはこうした天井川に対しての普通名詞であるが、わが村ではこれが固有名詞になっている。

34

割をしなければならない。その必要からここに条里制というものがしかれた。この辺は何時頃からそれがなされたかわからないが、都に近いからかなり早くからせられたことと思う。

この条里制はそれから永く続き、豊臣秀吉が検地をして、近世の土地制度をはじめまで永く続いたものである。縦を条、横を里とよび六町ずつである。

だから一条里区は方六町で、この一区かくをまた方一町の地、六六三十六区にわけ。この一区を一坪とよぶ。この一坪を更に十区に分けて一反という。一反は三百六十歩である。このようにこまかく分けると、土地をさし示すのに都合がよい。

例えば九条五里六ノ坪と言え、現在も残っている五之里の六ノ坪を示すのである。今祇王村でこの坪の残っているのは、五之里の六ノ坪のほか、辻町の六ノ坪、富波の五三条、五ノ坪・八ノ坪・十ノ元・北村の八ノ坪・上屋の十五坪等である。また上屋の一の井も一里の地点から出ているからかも知れない。

坪割は数字で言うのにも限っていない。富波で言えば、法師郷・君換・経田・堤下等とよぶようなものである。

野洲郡では五之里のほか十二里・兵主の五条・六条等が条里の名ごりである。

五之里字妻ノ神^{さい}にある妻ノ神社は、今から千百年も昔、仁寿年間にはじめて建てられたといわれる。ここには男女二体の神像を祀る。この近くの福応山浄円寺は、伝教大師の建立、叡山三千坊の一つとさえ伝えられ、そのゆゆしき由緒も悲しいかな、信長のためすっかり焼けてしまった。文禄の頃（一五九五）了正という人によって再興されると共に、宗派も真宗にかわった。近くの薬師堂の如来さんは伝教大師の作といわれている。

（四） 永 原

家棟川の廃川を越すと大字永原である。その川の麓（？）にある屋棟神社は祇王井川をつくるとき家棟川守護の神として祀ったと伝えられる。底なき天井川の狂暴に対して人々は人力以上のものに頼らざるを得なかったであろう。

今はその廃川あとにぼつぼつ人家や村立の診療所も建ってきた。幾千アールのこの廃川の活用の方法こそわが村のひらけいく方向を決定するものである。家棟川については別に桑川先生のお話をきくこととしよう。

永原という地名はおそらく自然の景観からつけられたものと思う。ここに永原氏が城を構えたのは、その初は、はっきりとわからないが栄えたのは室町時代であった。系図によると宇多天皇七代佐々木経方

系図とは野洲町市三宅三宅氏蔵。
経方は佐々木系図にのっている。
福谷氏蔵 永原氏由緒。

佐々木一族はよくその土地の名を名乗ったもので馬淵氏、三宅氏、永原氏小嶋氏等それぞれである。

宗牧
俳人にして連歌師なり、名高い松永貞徳の先生で永禄頃の人、いわば北村季吟を教えた先生のそのまた先生である。
松雲軒は禅宗寺院と思われるが今はそのあと不明。
天正十二年(一五八四)

35

郡史による。

ここから近い小堤の奥にかな山とよばれるマンガン鉱がある。

堀は現在一方は堀田となり一方は昭和十六年に家棟川がきれて埋まって天守畑とよばれた高地は昭和八年新校舎建築の節土の必要からくずされた。
文明十二年(一四八〇)今は城山とよぶ。

奥地志略には学校の運動場のことを永原後家屋敷跡とよび、これ永原右近の後家で太閤秀吉の上臈頭の宅とかかかっている。
これは一七三四頃かかれた本で下記古書もその志略のこと。

36

観音寺
栗太郡常盤村芦浦にありて昔は四万石の代官湖上船総奉行五代將軍綱吉の頃までなかなか勢があった。宗派は天台宗。

の四男家行からはじまっている。家行から五代目の家長になって、はじめて江洲永原城主とはっきりかかれている。また一説には、秀郷流の藤原氏であるといわれているが、野洲郡史に橋川先生は「永原氏が家伝に佐々木氏を称しないのには隠れた理由があるかも知れないが佐々木の庶流と見るのが正しいのだろう。」と書いておかれる。とも角永原は小さいながらも永原氏によって城下町として作られたものだ。
紺屋町と呼ぶ一画もある。

中世のこの時代には、美濃路(木曾路)に於ては、守山・永原の両宿が最もあらわれ兵主あがりの湖上の旅人までもこの永原の宿についたといわれる。宗牧の東国紀行に永原の松雲軒で(一三四四)「秋はけふいとどあずまの雲ゐかな。」とうたったことがかかっている。天正初年の美濃路紀行にも永原の名がのっている。

こうして、交通上の大切なところとなり永原城が濃州口の押えとして重要な根拠地であったことは近世になってからもかわらないで、秀吉が天正十二年に坂本から丹羽長秀に与えた手紙に、「一……江洲永原に秀次・高山右近・中川秀政……其の外人数一万五千の積りにて陣取らせ申し候事」とかかれています。一万四五千以上の兵をおいたことがわかる。

この頃、永原名物は火うち石でそれを売る家がならんでいたという。つまり永原が大切なところだから城ができ、城ができたから町ができたというわけである。交通については高畑先生のお話をきくこととして、祇王小学校の運動場について話そう。

これは永原氏別館址で周囲に堀をめぐらしている。これはおそらく朝鮮人街道をへだてて約八百メートルはなれた永原城を守るための出城であったであろう。

永原氏由緒に「文明十二年小堤村ノ続キノ山ニ城ヲ築ク、是甲賀郡堺メナリ、重秀是二居ス……」とあるが、この配置から見るとこれ等三城(永原氏別館・永原城・城山)で二街道を守ったものらしい。もちろん当時の二つの街道がそのまま今日の道であるとはいえないだろう。少くともこの永原氏別館とよばれる出城は二つの街道のまん中にあつたわけで、従がって朝鮮人街道はもっと弓形に江部の永原城のそばから北村、小南の方を廻っていたかもしれない。しかし深沢の土手がまっすぐで近道だからそのまま縄手となつたらしい。

永原の上町の三つ辻に国宝と碑の立った薬師堂がある。境^{さかいどう}堂ともよばれ福林寺七堂の一つであると古書にかかっているが、これも永原城と関係があつて、当時の代官があつた芦浦観音寺に今も属している。(明水四十四年から順徳寺より再び観音寺に属す)ここにある木造薬師如来坐像は明治四十二年に定められた旧国宝で、御丈八十六センチメートルで藤原時代(県教育委員会美術目録)の作といわれ或る本(国宝綜覧)では鎌倉時代といわれるが、いずれにしても十三世紀を降ら

1421

1663

1744

慈覚
名は円仁。天台第二世
座主で伝教大師の弟
子。

貞治三年とは北朝年号
で南朝では正平十九年
(一三六四)
一五〇〇頃

永原前遠州大守金峯松
林とした墓は永原越前
守重虎の墓である。

37

安土宗論でもわかるよ
うに信長は浄土宗に力
をいれた。

朱印状とは將軍が朱印
をおしてたしかにそう
だとかかれた証書。

如来さんは明治四十二
年国宝指定
県教委の目録は室町

以上の外十王堂があ
る。浄方寺、薬師堂は
今はなくなった。

38

歴史は過去を知り現
在を理解し未来を察知
する学問だが過去を知
ることが先ず第一条件
である。

延文五年は南朝の正平
十五年(1390)
その棟札今はなし。

ない名作である。

今の御堂は明治十一年の再建であるが、ただ長押^{なげし}だけは以前のを使
ったので、その長押裏に応永二十八年、足利將軍義持が建てた意味の
ことが書かれている。これは永原がどんな町であったかを物語るもの
ではなかろうか。

福谷山順徳寺は寛文三年にはじめられ、福泉寺は応永二十八年義持
將軍によって建てられたといわれるが、永禄の頃戦争のため焼かれ、
延享元年に中興されて知恩院の末寺となった。ここから近い常念寺は
常時念仏を唱える道場という意味から名づけられたという。慈覚大師
がはじめられたというからはじめは天台宗で、しかも千年の古い寺で
あるが、貞治三年にすっかり焼け、それから三十年程後の応永三年に
再び建ったが、その時には今のように浄土宗となった。

それから百年程して城主永原氏の菩提所となった。今も門を入れて
右手の奥に永原氏代々の墓がある。それから信長の時、一時安土へ移
ったこともあり、今も向うに常念寺屋敷という小字があるといわれ、
東坂の阿弥陀寺と共に安土浄厳院の末寺としての二大寺である。信長
の頃には寺領三十石を寄せられなかなか栄えた。徳川時代となっても、
高五石と書かれた家光將軍の朱印状がある。

瀬田の唐橋まで聞えたという「常念寺の夜中の鐘」はこの三代將軍
が泊った時からつきはじめられたという。門を入れて右手の石造層塔
は昭和二十三年に重要美術品と指定された鎌倉時代のものである。

本堂の旧国宝七十九センチメートルの木造阿弥陀如来は藤原時代の
手法をうけついでにはいるが、両袖には鎌倉の終頃の作風をみせてい
るので、鎌倉時代作という人もあるし室町時代という人もある。

常念寺境内にある忠魂碑はもと小学校運動場にあったのだが、終戦
後ここに移されたもので、百二十三柱のみたまは、日本の国と郷土祇
王を荷なって立つ皆さんの成長を常に念じておられることだろう。

以上いろいろ述べたが、ただこうした事を知っただけで何になるか
と言えばそれまでだが、自分の、自分の家の、自分の村の、自分の国
の過去を知ること、その事だけでも大切ではなかろうか。こうした過
去のいろいろを此の村の歴史的富という。私たちは意識すると否とに
かわらず、常に郷土の歴史的富の上に立っているのである。

(五) 江 部

江部の中央にある菅原神社は源頼朝がはじめてここに天神さん(菅
原道真)をお迎えしたといわれているが、それは確かではない。しか
し延文五年に社殿を再興したという棟札が明治二十八年の取調書にの
っているから、今から六百年程以前から既にあったことは確かである。

菅原神社は学問の神様である。

月並の百韻の連歌は明治八年までつづいた。

宗祇
連歌の大家で朝廷から花の下をいただいた。文亀二年（1502）没、82才

玄玄堂は現在の祇王小学校の地にあったといわれる。

郷土庶民住宅として本郡では下記二軒の他に中里村の近松家野洲町の遠藤家がある。

39

宗音の甲冑等今もこの家にあり、また永原城の地図もある。

土安神社は童子川をつくったときあらわれた童子をまつという。

六角佐々木は安土観音寺城に本居を構え信長に滅ばされるまで十八代四百年間つづいた。永禄四年(1561)

永原軍談は元禄より大分降った頃のもので価値が少ない。

永原氏由緒前出
永原氏滅亡後一時信長のためとりあげられ佐久間盛政がいたこともある。秀吉の頃には甲賀出身の深尾清十郎が代官としてここにいた。元禄の頃つぶされる。享保の頃にはすでに狐がすんでいるといわれるほど荒廃した。

40

福谷藤助を俗に浮貝藤助とよぶ。
専念寺の伊賀坊了誓僧侶の身でありながらと家康にしかられ首をここにすてる。

この神社では昔から毎年、年の始めに天下の平和を祈るため社殿で連歌の会がもよおされた。それにはこの地の地頭永原氏が（永原氏ほろんで後は代官が）発句を出されるのが例であった。また毎月二十五日には月並の連歌の会が開かれた。こうしてこの地の郷土文学はこの神社を中心として成長していったのである。北村の木村盛美氏の家に蔵されていた永原千句にはかの名高い宗祇の名も見えていた。後この地から、北村季吟が出たのも何も不思議はない。徳川家康は千句料として八石の寄附をした。

医師村田牧太によって弘化三年に開かれた玄玄堂は児童六十五名の大きな寺小屋であった。明治天皇を負い奉って火災を避けた村田むつの事は木田先生に聞くこととしよう。

江部庄は永原・中北・北の三ヶ村で今日の江部は大字永原の中にふくまれている。ここから東に道をとれば中島家がある。北村の木村家と共に郷土屋敷の面影をとどめる大切な文化財である。

中島氏は永原家の家老で、中島宗音は家康に仕え慶長五年伏見城で戦死した。それ以来幕末まで二十石八斗の無役郷士であった。

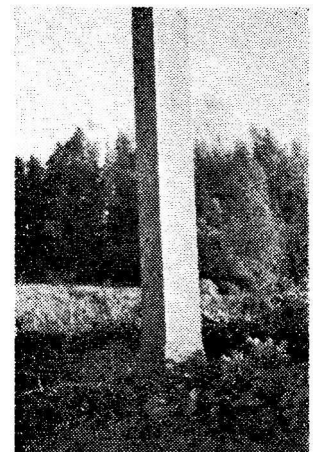
江辺山光念寺は天正元年に中興された真宗木辺派の寺である。同じ字馬場にある。土安神社は埴安比売命をまつ。童子川との関係よりもむしろお城との関係にあるのかも知れぬ。

ここから堀を越えた処に永原御殿址の碑が立っている。御殿と呼ぶが実に二百メートル四方の城である。これは室町時代の始め頃からここを根拠地として勢力を得た永原氏の居城で、よく本家佐々木氏のためにつとめた。例えば永禄四年永原安芸守は、手勢三千騎をひきつれ佐佐木義賢のために京都白川口合戦で討死をとげている。（永原軍談には永禄八年としているがこれは誤りであろう。）

由緒によると「永禄十一年永原一族没落す」とあるから、六角佐佐木と運命を共にしたもので - - つまり信長のために没落させられたのである。

永原氏の話すればつきないがその勇ましい最後をかざる人は永原伊豆守の三男で福谷藤助でめる。慶長五年の関ヶ原役の時、石田三成の軍に従ったが、ついに敗れて帰り、自宅に火を放ち、赤野井より船にのり大阪へにげんとしたが、赤野井の人に妨げられ自害した。その土地の者はその首をたずさえ家康に賞をもとめたという話がある。その首をすてた首塚は今吉身のお宮さんと道をはさんで反対側、三〇メートルの田圃の中にある。

家康は永原氏の退いた後、この城を京都へ上る途中の宿舎とした。それから城といわず



(むかしの光いまいずこ)
(永原城址)

旧国宝の書院は、
奥行五間
梁間三間
単層
屋根入母屋造柿苳
現在重要文化財

近江源氏は字多源氏と
もよぶ。
伊豆守重賢
飛弾介実治
辰千代重治
と は父子とも兄弟
ともいわれている。重
治は秀吉に用いられ後
元和元年大阪城落城で
豊臣氏にじゅんじた。

41

天正八年(1580)
文政八年(1825)

寺と碑は妓の字であ
る。祇王は京都嵯峨住
生院で建久元年(1190)
没 38才

秀信は信長の孫

1019石 - 三上領
278石 - 朽木領
10石 - 寺社領

文和三年は南朝の正平
九年(1354)
享祿四年(1531)

42

大正六年滋賀県発行近
江名木誌

御殿とよぶようになった。家康家光もここで泊っているが、その御殿
とよばれる建物は、現在芦浦観音寺にある旧国宝の室町時代の書院が
それで、門は大字北の浄専寺の表門になっている。

昔の光いまいずこ、ただ苔むした石垣と半ば田圃になった堀がつわ
ものどもの夢のあとである。

(六) 中 北

六角佐々木の一党として永原氏はそれと運命を共にしたとはいえさ
すが名門の流れ断やすにしのびがたく織田信孝(信長の子)は永原辰
千代に七百石と飛驒介に千石、計千七百石の土地を所有してもよいと
いう安堵状を与えた。それは今尚此の中北の永原五 氏が蔵しておか
れる。(=月へんに義)

この部落の神社は貴布禰神社で明覚寺は天平八年大水のためすっか
り流れ後再興、常光寺は文政八年火災でやけ、文政十三年再建、妓王
寺は今から四百七十年程前の文明のころそれこそ村人相集って建てた
といわれる。ここには祇王井川水利のいろいろの記録をはじめ略縁起
が蔵されている。

この村と大字北との間に堀をめぐらし、少し高いいわれありそうな
地が祇王祇女姉妹の生れた屋敷のあとと伝えられ、大正のはじめ碑が
建てられた。

英雄の建てた高樓は時の前に朽ちはてても、祇王井川の水は永遠に
かれないであろう。今や流れ流れて八百年、祇王村三千五百の生命の
水はいつまでもいつまでも流れて渴れることがない。

(七) 北

大字北はおそらく江部の庄の北に位置しているから名づけられたも
のであろう。ここを昔から治めていた人をしらべてみると、室町時代
には六角佐々木氏それから織田秀信、江戸時代となつてはじめは芦浦
観音寺 - 角 倉与市、それから北村季吟の出た頃には小野、猪飼、西、
等あわただしく代り元禄十一年になって三上の遠藤但馬守と西江州の
朽木和泉守との二つに分れて治められ明治に及んだ。

寺としては永原城の門が表門になっている浄専寺は文和三年に再
建、専念寺は享祿四年に建てられ、西遊寺は文和の頃につくられたと
いう。

八幡神社の数本の棕の大木は尊い木とされていたが、今も木村家の
庭にある高麗柿は秀吉の朝鮮の役のときの将兵によって持ちかえられ
たと本にのっている。

童子川・大溝川・深沢と、こうして水となみなみならぬふかい関係

深沢からはいるとまもなく左の方に北村季吟家祖先の墓地がある。親せき木村家が世話しておられる。

にある北村のこのお宮さんが高い石垣の上におられるのも成る程と思われた。こうして水になやまされつつ、しかも水を求めて逆水かんがいをせねばならぬ北村については山本先生のお話を聞くこととしよう。

北村季吟・湖春・可昌・木村鳳梧と学者の沢山出た大字北を後にして上屋に向う。

(八) 上 屋

八幡神社
山の神といわれている。(五十八頁参照)

昔は今の篠原村と共に桐原庄に属していたといわれる。上永原の上と紺屋町の屋とが合して上屋となったのは明治五年である。小字角田に八幡神社があり昭和十六年にはこの神社の処をあやうく残して家棟川がきれた。

天慶三年(940)

祭神ウカノミタマノ神

この川の反対側には俗に野田百反とよばれる上屋の土地がある。そこには天慶三年の創立といわれる篠原神社がある。平将門の乱にその縁起を持ち、かつては広大な社領を有して輪奐^{りんかん}の美をつくし社殿が並んでい時のこともあったという。明治三年家棟川の大水のため流されて、水との苦しい歴史を多く持つ。現在は明治九年の再建という。

43

天文八年
天文十九年
普通寺には山号寺号がある。

見星寺は薬師如来をまつり永原越前守の建立であるといわれている。同じころに建てられた清源寺は地藏菩薩をまつり山号はない。昭和十六年の家棟川の決潰場所を前にしてはるかに谷底のような処にある。

源親行の著で十三世紀半ばのこの地方の様子がよくわかる。

東関紀行には深沢一帯が美しい筆致で書かれている。「南には池のおもて遠くみえわたる。むかひの汀、緑深き松のこむら立、波の色もひとつになり、南山の影をひたさねども青くして洸瀧^{こうよう}たり。洲崎所々に入ちがひて、蘆かつみなど生ひ茂れる中に、をし鴨のうちむれて、飛びちがふさま、あしでをかけるやうなり、」と。

(九) 辻 町

道路の辻や村界にはよく地藏さんがある。

辻町といえば辻の地藏さんで名高い地藏堂は、正徳三年(一七一三)に再興されたといわれ、創建は相当古く、子安地藏と呼ばれている。ここは字砂原であり近くの西徳寺は長流山と呼び、いずれも家棟川の過去を語るような気がする。西徳寺は享禄の頃戦火にあったが後再興された。近くには城山、古城の夏草しげる夢の址がある。

1530
浄土宗
寺と城と関係がある。

天徳二年(958)

国道第八号線を境に三上神社がある。天徳二年御上神社よりうつしたという。篠原神社といい三上神社といい、さすが銅鐸の出た丘陵にある御宮だけに古い起源を持つ。

野洲町三上にあり。
昭和二十七年に発見
" 二十八年に調査

この御宮の横の山を阿部子山とよび、俗に宮山ともよばれ、国道第八号線の工事の時、偶然ブルドーザーによって開けられた古墳は、こ

44	<p>の辺一帯の埋蔵文化財の姿を教えてくれるものであろう。</p>
	<p>ここから近い大塚山古墳は美しい形で甲^{かぶとやま}山・円山・大岩山・天王山とつづく桜^{さくらばさま}生古墳群と一連のものである。</p>
桜生は野洲町に属す。	<p>昔の道路はこの宮山の裏を通りそこを八軒屋とよび、今日の辻町の</p>
辻町の石切場 この辺の石は比良の西の石に対して東の石とよばれている。質はやゝおちる。	<p>前身をなすものだといわれている。この街道はそれからはるか篠原の南方古城^{ふるしろ}の近くを通り、野園^{のぞの}の千軒趾といわれるアラビヤナイトのような幻夢の土地にのびている。</p>
大津長浜間連絡 一日二回きまった時刻に合図した。	<p>吉祥寺山(俗に寺山)・城山がある。一番よく見える相場振山^{そうばふり}は昔、大津の米の相場を田上山より受けて観音寺山へとり継いだもので、二メートル四方もある黒い枠のした大きな手旗で合図をしたからその名がある。</p>
	<p>こうした山もすべて故郷を外にするものにはいつまでも臉に残るものである。</p>
石川啄木 良寛	<p>「ふるさとの山に向いて言うことなし、ふるさとの山はありがたき哉」とさすらいの詩人はうたい、「草枕夜毎にかわる旅寝にも、結ぶは同じふるさとの夢」……………</p>
	<p>遠き異国で化した百二十の若き魂が、いかに故郷の山を恋い、祇王井の水をもとめたことだろう。人は死んで故郷の土にうずめると早く土にかえるが、他郷に埋めるとなかなか土に還らぬという。それは科学的にはどうか知らないが。 - -</p>
	<p>鉄道は電化され、近くに駅ができ、家棟の廃川あとには工場や車庫が並び、辻町山上のダムはここでは農業用水よりもむしろ工業用水に使われ、中仙道には山手の社宅相手の店が軒を並べ、国道第八号線には工場の荷を積むトラックの音がやかましく、その奥の弾丸道路には高速度の交通が発達する。辻町の繁栄はわが村の背戸があげはなたれにこととなる。</p>
45	
祇王村は ドイツのように北の平野と南の丘陵との二つからなる。お米のとれる北の平野は童子川で区切られて北へはのびない。	<p>祇王子供仲よし会の七人が、隣村のお客さまを案内して辻町に来た頃には、もう夕方近かったので、明日への夢をいだきつつわかれた。</p>